

由井 浩

初 秋 の 六 義 園

9月の後半に早稲田の夏目坂近くを歩いていた時に、民家の門の左右で芳香を漂わせている大きなキンモクセイ（金木犀）の前を通った。名の由来などが気になって、帰宅後にキンモクセイについて調べてみた。幹が動物の犀（サイ）の肌似ていることから木犀の名がついたことがわかった。さらに、キンモクセイの近縁にギンモクセイ（銀木犀）という木があり秋の初めに白い花が咲くということを知った。キンモクセイとギンモクセイの両方を見ることができる場所を探した結果、東京・駒込にある六義園で両方を見ることができたことがわかった。

10月の初めに六義園に行った。パンフレットによると、六義園は五代将軍・徳川綱吉の信任が厚かった川越藩主・柳沢吉保が元禄 15（1703）年に築園した回遊式築山泉水の大名庭園で、六義園（リクギエン）の名は、中国の詩の分類法（詩の六義）に由来している。六義園では晩秋の頃には園内一面の紅葉を堪能できるが、今回はギンモクセイの探索のために初秋のこの時期に訪れた。

正門から入って左に向って歩き始めて直ぐに竹垣の上に伸びるキンモクセイを見つけた。金色の小さな花が沢山咲いていて、芳香を放っていた。



←竹垣の上に伸びる
キンモクセイ

↑芳香を放つ
小さい花々

さらに歩き進み、心泉亭という今は集会所として使われている建物のところに来た。この建物の近くにギンモクセイの木があるという情報だったので必死に探してみたが、白い花が咲いていなかったためか、ギンモクセイの木を見つけることはできなかった。

大泉水に影を映す茶屋 →
ギンモクセイの探索はあきらめて、公園の中心



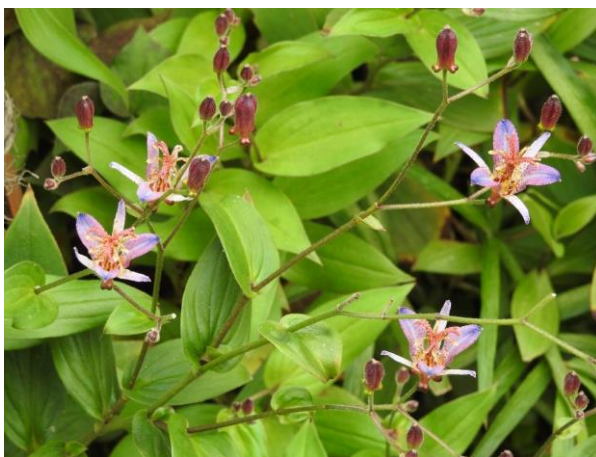
にある大泉水という池の周囲の風景を写真に収めることにした。

池端から大泉水の対岸を望むと、木立を背景に佇む茶屋が大泉水に影を映して穏やかな初秋の風情を漂わせていた。

池端をもう少し歩いていると対岸の一本の木が目にとまった。紅葉が始まっているこの木は来園者の人気を独り占めしているようだった。



通路の両脇の草花に目を向けながら園内を一巡りした。ハギやホトトギスなどの秋の花がところどころでひっそりと咲いていた。木立の方からは夏の名残のツクツクボウシの鳴き声が聞こえてきた。



ハギ（左）とホトトギス（右）の花

ギンモクセイを見るという初期の目的は果たせなかったが、晩秋の頃とはまた違う、この時期の六義園の静かな表情を十分に味わうことができた。